

ノンフィクション作家

高野 秀行 さん

初めて読んだ高野さんの著書は、高田馬場を舞台にした「アジア新聞屋台村」。アジアな楽しさが、ちょっと誰にも真似のできないユーモアあふれる文章で綴られていました。その文章に魅せられ、手当たり次第に読んだ著作により、高野さんが、世界中の辺境で、好奇心と冒険心のおもむくままに、無茶な探検をしながら、その成り行きを知的で冷静な視点で観察、分析し、人を惹きつける文章で発表していることを知りました。たまたま早稲田大学探検学部（じゃなくて探検部でした）に入り、その結果25年以上続けられてきた旅により、高野さんが得た辺境、外国人、日本に関する知識や感じ方などから、私達が学べるが多くあるように思います。（聞き手・構成：町田弘香、山添健之）



——高野さんの著作のテーマの一つとして「辺境」の探検があると思いますが、「辺境」に惹かれたきっかけは何だったのですか。

子供の頃はみんな、野山や川で秘密基地を作ったり、探検・冒険をしたりしますよね。僕もそういうのが大好きでした。普通の人は大人になるにつれて探検とか冒険なんていうものを卒業するんですが、僕はしなかったわけです（笑）。それから、僕は高校までは「優等生タイプ」だったんですが、そういう生き方が嫌になって、海外に行ってもっと面白いことがしたいと思うようになりました。早稲田大学に入学したら探検部というサークルがあったので、「これだ！」と思って入ったわけです。

——早稲田大学探検部は、どのようなところでしたか。

入部してすぐの頃は正直ピンと来なかったし、何をしていたかわからなかったですね。それが1年生の終わりに1人でインドに行って変わりました。インドへの一人旅というのは、探検部では最低レベルの活動なんですが、現地の詐欺師に物の見事に騙されて、身ぐるみはがされてしまったんです。パスポートも航空券も盗られ、お金も150円くらいしかない。文字通り路頭に迷いました。

でも、現地で偶然知り合った小学生の家に居候させてもらえて、一家4人が三畳間に住んでいるようなところだったんですが、当たり前のように受け入れてもらえました。そこで2週間、生活をしながらパスポートの再発行手続きを行ったり、航空券の再発行の交渉をしたりしました。

航空券の再発行なんて、普通は絶対ダメなんですけど、何度断られても毎日通って「いや、日本に帰りたいんだ」と訴えていたら、だんだんえらい人が対応してくれるようになり、いつの間にか副社長と話をしていました。その副社長に気に入られて、航空券の再発行もお金の面倒もみてくれるということになったんです。こっちがびっくりしました。そんなこともあり、おかげで日本に帰ることもできました。

この経験が大きかったですね。日本を出るまでは外国語で交渉をするとか、一文無しで外国で暮らすなんて想像もしなかったのに、いざやってみるとできた。まあ、親切な人たちのお世話になっただけなんですけど、「どんなことでも、やればなんとかなる！」というちょっと間違った確信を抱いてしまったわけです（笑）。インドから帰ってすぐアフリカのガイドブックを買って、「次はアフリカに行く」と決めてしまいました。

——アフリカといえば、探検部の仲間とコンゴの奥地に
幻の怪獣ムベンベを探しに行きましたよね。どうしてそんな探検をしようと思いつくのですか。

当時、早大探検部では、サハラ砂漠をバイクで横断するとか、アマゾン河を筏で下るとか、チベット遊牧民と生活して羊の数をかぞえとか、それぞれの部員が本当に好き勝手なことをやっていたんですね。普通に考えればありえないような大それたことをぶち上げて、何人か集まって実際にやって、だいたいは無事に帰ってくるんです。だから、無茶なことを言うのには慣れていました。

ただ、日本と国交もないコンゴに遠征隊を組んで行って、密林で怪獣を探すというのはかなり度外れていたみたいで、先輩たちから「そんなことできるのかよ」という眼で見られましたね。

——コンゴでの探検をまとめた「幻獣ムベンベを追え」がデビュー作となったわけですが、探検の前から出版しようと考えていたのですか。

コンゴに行ったときはかなり話題になり、朝日新聞の社会面トップに記事が出たりして、出版社から体験記を書かないかという依頼が来たんです。探検部のリーダーは僕だったので、代表して本を書くことになったはいいいけど、それまで国語の作文以外に文章など何も書いたことがなかったから、書き方が全然わからない。最初の1ヵ月は1行も書けなかった。しかたなく、友だちに話すように書いてみたら、するすると書けました。結局それ以降の本も、友だちに話すように書いています。「美しい文章を書くぞ」なんて肩に力が入ると、文章がぎこちなくなりますね。

——今まででいちばん危なかった体験は、どのようなものですか。

「アヘン王国潜入記」で書いたのですが、ミャンマー奥地の「麻薬地帯」と呼ばれる場所に住み込んで、アヘンの材料であるケシを村の人と一緒に作っていた

ことがあります。そのとき、高熱が出たんですが、村の人は「わかった！これは熱病だ！」としか言わない（笑）。僕はコンゴでマラリアにかかった経験があるので、すぐ気づきました。マラリアは下手するとすぐ死んでしまうので、村の人に頼んで、医者がいるという大きな村に連れて行ってもらいました。持参した体温計で測ったら40度もある。それを医者に見せたら「おおっ！」って驚いている。てっきり熱の高さに驚いているものと思いきや、「このキラキラ光る棒は何だ?!」と言う（笑）。このときは「もうダメだ」と思いましたね。結局、その地域に1台しかないトラックを出してもらい、遠くの町まで出て無事治療できましたが。

あとは、乗っていた車が崖から落ちかけて、タイヤが谷底に転がっていったとか、山の中で村の男たちに追いかけてられている牛にひき殺されそうになったくらいですね。

僕は運がいい方だと思いますよ。

——今までの経験で、何がいちばん辛かったですか。

書いた本が全然売れないし、評価もされないという時期がずっと続いたことですね。

1作目の「幻獣ムベンベを追え」はよかったのですが、次の「巨流アマゾンを遡れ」は——アマゾン河を4ヵ月かけて河口から源流まで遡ったものですが——全く評価されませんでした。そのあともずっと同じで、40歳くらいまで鳴かず飛ばずでしたね。

僕の本は、シリアスではないので、正統的なノンフィクションとして評価されないんですよ。僕の本の「立ち位置」が読書界で分類できなかったんですね。書店では「紀行」のところにも「ノンフィクション」のところにも置かれなくて。

僕はシリアスに「俺はこんなことやってきたんだ」という書き方をするのが嫌なんです。実際大したことはやってないというのもあるし、シリアスに書くというのはすごく簡単で芸がなさすぎる。それより、

面白い物語として書きたいんです。その方が現地の雰囲気や人々の暮らしが手に取るように伝わりますしね。

自分では代表作の一つと思っている「アヘン王国潜入記」も、日本の読書界では評価されなかったですね。とりあげるべき「問題」として「取材」をして、ジャーナリスティックな文体で書けばもっと評価されたかもしれないけど、僕は村の人と一緒にアヘンを作って最後は自分も一緒に吸ってという話をユーモアを交えて書いたので、「不謹慎」とか「不真面目」と思われてしまいました。ま、無理もないか（笑）。

しかたなく、自分でお金を作って英語に翻訳してもらい、出版したら、アメリカやイギリス、シンガポール、オーストラリアなどの雑誌や新聞で書評に載りました。米「タイム」誌の有名な記者は、バンコクで会ったとき、「百年後、君はこの世にいないだろうが、君の本は残っているだろう」と言ってくれて、まあ、少し気が晴れましたね。

「面白おかしく書く」のは「ふざけている」でも「事実をねじ曲げている」のでもなくて、むしろ建前をとっばらって「現実」に近づこうとしているつもりなんですけど、どうも理解されないみたいで……。でも、これからも世界中で自分にしか書けない本を書いていきたいと思っています。

——おそらく高野さんの中には、訪れた地域での少数民族の問題とか、民族紛争についての問題意識があると思うのですが、作品の中で明示的に主張されることは少ないですね。

もちろん自分の意見を声高に言いたくなるときもあるし、正しくないことが行われているのを見て告発したくなるときもあります。そして、それをやっているジャーナリストやノンフィクション作家は多いのですが、真面目な書きぶりですら「告発」すればするほど、一般の読者には「あー、大変な人たちがいるんだな」と、かえって問題が他人事になってしまうという欠点

があると思うんです。真面目な本だけではよくないんです。

僕は「この人たちも俺たちと変わらないんだ」という共感を読者にもってもらいたい。他人事ではなく「自分事」として感じてほしい。だから現地の人たちのアホっぷりやとんちんかんぶりをあえて隠さないで積極的に書いていきます。女の子に恋して舞い上がったり、目先のカネにつられて騙されたりとか。親しみわくでしょ？（笑）

日本でも「在日外国人」の本といえば、「問題」ばかりです。在日外国人による犯罪とか在日外国人が受ける差別や偏見とか。でも実際に彼らと付き合ったり取材していると、様々な問題がありながらも、彼らにも普通の生活があって、そちらの比重の方が大きい。でもそっちの面を描いた本は少ないんですよ。日本に長い外国人自身が言ってますよ、「問題の話はもういい」って。どんなものを食べて、どんな恋愛をして、どんな家庭を築いているか、そういう普通の生活を描いて、日本に暮らす外国人を身近な存在にしていこうという仕事したいですね。

今は「移民の宴」という本を執筆しています。日本に移り住んだ外国人の生活を「食」と「コミュニティ」から描いていくというものです。これまで日本に住むブラジル人、ロシア人、イラン人、フランス人、タイ人、インド人、イスラム教徒、朝鮮族の中国人、スーダン人、フィリピン人のコミュニティの中に入って行って、料理と一緒に作って食べたりしながら、これまでの人生や日頃の生活などを聞いてきました。もう意外な話の連発で、ほんとに面白かったですよ。「こんな生活が自分のすぐ隣にあったのか！」と毎回驚いてました。早く読者の方に読んでほしいですね。

——そのほか、次回作などの構想があれば、教えていただけますか。

今、「移民の宴」と並行して、ソマリアの本も書いて

「この人たちも俺たちと変わらないんだ」という共感を読者にもってもらいたい。他人事でなく「自分事」として感じてほしい。だから現地の人たちのアホっぷりやとんちんかんぶりをあえて隠さないで積極的に書いていきます。

高野 秀行

写真は、ミャンマーのジャングルを象と旅する高野さん



ています。ソマリアは20年ほど前に独裁政権が崩壊して以来、無政府・内戦状態とされていますが、ソマリア内部のことは日本では全く知られていません。でも実は面白いことになっていて、「ソマリランド」という未確認国家ができています。以前は「ムベンベ」のような未確認動物に興味を持っていたんですが、今は未確認国家なんです（笑）。

ソマリランドは世界中のどこの国も承認していません、武装勢力が国家を自称しているだけではないかとも言われているんですが、実はすごくしっかりした国になっている。僕はもう3回行ってますが、国連などの力も借りず自力で内戦を終結させ、治安も回復して、民主主義や言論の自由もあり、複数政党制による大統領選挙までやっている。去年は平和裡に政権交代までしました。僕が調べたかぎり、アフリカ大陸約50カ国で、平和裡に政権交代が行われたことは4、5回しかない。奇跡に近い偉業なのですが、それが誰にも知られていない。

また、ソマリランドの隣にはプントランドというやはり「自称国家」があるのですが、基幹産業がなんと「海賊」なんです。政府は、建前では「海賊を取り

締まる」と言いつつ、実際は政治家・軍隊・警察が海賊の分け前をもらって政府が機能している。ここでは海賊がありふれていて、僕も一度「海賊をやらないか」と誘われました。漁師の網元みたいな仕組みで、誰でもカネをもっていれば参加できるんです。これもすごい世界でしたね。

ソマリアはどこへ行っても面白いことだらけです。20年間無政府状態で、当然中央銀行もないのに、昔の政府が発行した「ソマリア・シリング」が未だに流通していて、みんな普通に利用している。中央銀行がないのに通貨が使われているなんて経済学の常識を軽くひっくり返しているんです。しかも、政府が存在していたときよりシリングは安定しているというから笑えます。政府があった頃は公務員の給料を払うために紙幣を刷りまくって、インフレがひどかったんですが、今は政府がないから誰も紙幣を刷らないというのがその理由です。国とは何か、政府とは何か、もうわからなくなるんですよ。

個々のエピソードは笑えるし、でもそれだけではない。国家論や平和論にもつながって、ものすごく面白い。これも是非早く日本人たちに伝えたいですね。

——高野さんの好きな作家はいますか。

たくさんいますけど、現代の作家を1人挙げるなら、宮田珠己が好きです。日本全国にあるウルトラマンより大きな仏像を訪ねて歩くという「晴れた日は巨大仏を見に」とか、ベトナムの珍妙な盆栽を求めて彷徨う「ふしぎ盆栽 ホンノンボ」など、エッセイとも旅行記ともノンフィクションともつかない本をたくさん書いています。この人の本を読むと、世界がちがって見えるのが最高にいいですね。

外国人作家ではコロンビアのガルシア＝マルケスが好きです。「百年の孤独」が一番好きですね。僕は現地に行く前にその土地の文学を読むようにしていて、ガルシア＝マルケスもコロンビアに行く前に「資料」として読んだのですが、すっかりハマってしまいました。

——世界各地を旅された高野さんが、今の日本について感じていることは何ですか。

今年「未来国家ブータン」という本を書いたのですが、ちょうどブータン・ブームと重なって、「日本人がブータンから学ぶ点は何か」とか「日本人はどうしたら幸福になれるか」なんて取材をたくさん受けました。そのときにいろいろ考えたのですが、実は日本人は不幸が好きで幸せが苦手なんじゃないかと思うんですよ。

日本は景気が低調とはいえ、世界有数の経済力と治安の良さがあって、水や自然が豊かで、60年以上戦争がない社会を実現している。なのに、みんな「日本はダメだ」と言っている。一方で日本に住む外国人の多くは「日本はいい国で、私は幸せ」と言っている。同じ場所に暮らして、どうしてこうも違うんでしょうね。僕は「日本人はマイナス面にフォーカスする傾向がある」と思います。そのような思考回路が、細かいアラを見つけては改善し続けるという日本のテクノロジーの原動力になっているんでしょう。でも、良い面ばかりではない。

と、僕も日本のマイナス面にフォーカスしてしまうのですが（笑）、日本では幸せはよくないものなんです。例えば「俺はかみさんとうまく行っていて、子供もすくすく成長して、仕事も順調で……」という話をすると、友だちがなくなるような気がしませんか。「大変だ」「忙しい」「しんどい」と言っているほうが人間関係がうまくいく。「不幸ルート」に乗っていると落ち着くというのでしょうか。

もう一つの原因は、日本の風土病とでもいうべき「仕事病」ですね。「仕事＝その人の価値」という感覚があまりに強いので、楽しく幸せに暮らしていると、まるで「頑張って仕事をしていない＝ダメな人間」みたいな気分になるし、周囲からもそう見られてしまう。在日外国人にもその病気にかかってしまう人がいます。いや、世界でも屈指の恐ろしい風土病ですよ。

——弁護士会・弁護士にご意見はありますか。

弁護士というと、遠い存在で気軽に近づいてはいけないというのが一般庶民の感覚だと思います。僕自身、在日外国人の人たちのために働いている弁護士の先生と話をしたとき、その先生がボランティアで仕事をしたり、私にも親切丁寧にアドバイスをしてくれたりしたので、持っていたイメージとのちがいに驚きました。

まず、一般の人が「どんな問題を弁護士に相談できるのか」というところから始まって、相談窓口をわかりやすくしたり、少しでも敷居を低くするような工夫があればいいかなと思います。

プロフィール たかの・ひでゆき

1966年、東京都生まれ。早稲田大学在学中に探検部に所属し、アフリカ赤道直下の探検行を記した「幻獣ムベンベを追え」（集英社文庫）で作家デビュー。「誰も行かないところへ行き、誰もやらないことをやり、それを面白おかしく書く」をモットーに、アジア、アフリカの辺境を中心に世界中をまわっているほか、在日外国人についての取材執筆も行っている。著書に、「巨流アマゾンを遊れ」「アヘン王国潜入記」「ミャンマーの柳生一族」「異国トーキョー漂流記」（以上、集英社文庫）、「未来国家ブータン」（集英社）、その他多数。